

各企業の考え方

□ 算定を行う背景・目的

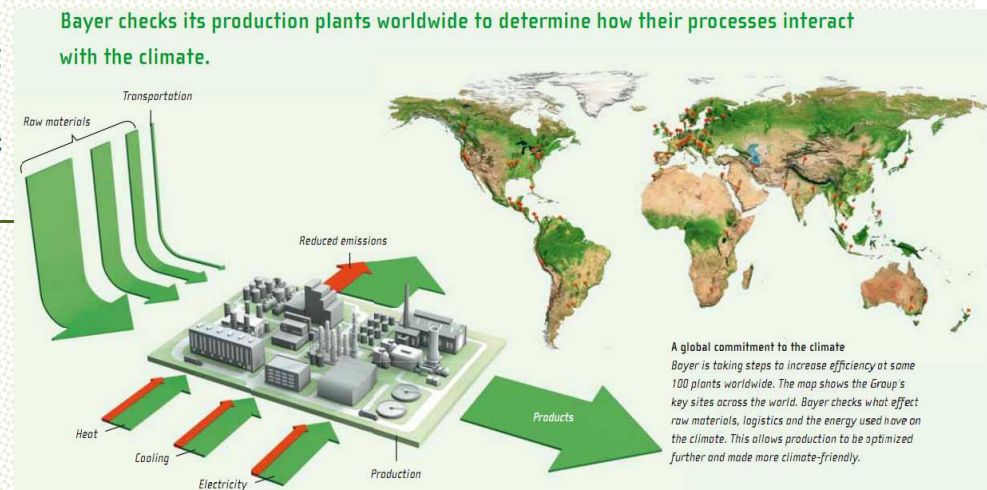
- 気候変動はメガトレンドの一つであり、企業としての透明性を保ち、ステークホルダーやCDPからの要求に応え、サプライチェーンにおいて削減可能な部分を特定するために、Bayer Climate Programによって一部のScope3排出量の算定を2007年に開始した。
- また、2011年のGHGプロトコルによってScope3スタンダードが公表されたことにより、サプライチェーン排出量を算定することで排出削減ポテンシャルを特定することができるようになる。

□ 算定結果の活用方法

- CDPや様々なサステナビリティの格付け機関への報告やサステナブル報告書において情報公開を行っている。
- また、社内的には算定対象として様々な分野において最適化を図るために、算定結果の分析を行っている。

□ 算定のメリット

- サプライチェーンにおける重要な排出源を特定し、削減につなげることができる。また、定量的に排出量を把握することで、その削減目標を立てることが可能になる。



□ 算定方法

- GHGプロトコルのスタンダードに基づき、財務支配基準で算定範囲を設定している。購入資材、輸送、出張、リース車両、製品の廃棄といったGHGプロトコルのScope3スタンダードで定義されているカテゴリの他、外注先のデータセンターでの排出も算定している。

□ 社内の算定体制

- Bayerにはヘルスケア、農作物、材料科学の3グループがあり、それぞれのグループから算定結果が全社的な環境部門に報告され、集中情報管理システム(BaySIS)において、とりまとめ・情報公開が行われる。

各社の考え方

□ サプライチェーン排出量の削減に向けて

- 電話会議による出張回数の削減、モーダルシフトなどによる輸送や貯蔵の最適化などを行っている。
- また、BAYERの最新技術、材料を集積したビルを建設し、自社製品やサービスによる使用段階の排出を削減をプロモーションする“EcoCommercial Building program”を行っている。

□ サプライチェーン排出量算定の課題

- 全てのカテゴリについて算定を行っているわけではなく、データの利用可能性や影響範囲を考慮して、重要なカテゴリのみを算定している。
- 十分な排出原単位が整備されていないことは事実だが、Scope3排出量はケースバイケースで算定することが必要であり、統一的な原単位を整備することは難しいと考えている。

□ これからサプライチェーン排出量を算定する方へ

- ライフサイクルアプローチに基づいて排出規模を評価し、透明性を向上させることで、削減のポテンシャルを認識することができ、意義のある目標設定や、様々なスタンダードに基づく情報のコミュニケーションに対して意義のある解釈を行うことができる。

